

観点別評価を 振り返る

2022年度から、高校では観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）が本格的に導入されました。この1年間観点別評価を行う中で、方向性や課題など、見てきたものがあるのではないのでしょうか。

高校の先生方からは、依然として、実践の蓄積が少ない観点別評価に対する不安や課題についてのご意見があります。今回の記事では、2022年度に実施した観点別評価を振り返り、先生方の課題感や取り組みなどについて、ヒアリング、アンケートをもとに紹介します。そして、さまざまな評価の工夫を行い観点別評価に取り組む3校の事例を紹介します。

CONTENTS

Part 1 概況 → p18

Part 2 高校教員アンケート → p21

Part 3 実践事例 → p26

- 自修館中等教育学校 → p26
- 大手前高松中学・高等学校 → p30
- 名古屋経済大学市邨中学校・高等学校 → p34

参考資料

観点別評価の概要を知る

- 国立教育政策研究所
「学習評価の在り方ハンドブック」
「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryu.html>

概要を動画で見る

- 独立行政法人教職員支援機構
新学習指導要領に対応した学習評価（高等学校編）
<https://www.nits.go.jp/materials/youryou/034.html>

関連記事

- Guideline2022年2・3月号
「どうする？ 観点別学習状況の評価」
- Guideline2020年7・8月号
「『主体的に学習に取り組む態度』をいかに評価するか～自己調整学習に注目して～」
- Guideline2019年4・5月号、7・8月号
「高校における資質・能力の育成と学習評価」

バックナンバーは、「Kei-Net Plus 教育関係者のための情報サイト」で公開中

<https://www.keinet.ne.jp/teacher/media/guideline/>



Part 1 概況

指導と評価の一体化をめざし 計画方法の改善が進む

Point

- ✓ 観点別評価本格導入初年度が終わり2年目に入る
- ✓ 定期考査等の既存の取り組みを見直す高校も
- ✓ 何のための評価かを改めて考える

1年間の取り組みを振り返り 評価方法の見直しが進む

2022年度から高校でも本格的に導入され、2年目に入った観点別評価について、改めて現状を確認していこう。

新学習指導要領では、「カリキュラム・マネジメント」や、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」とともに、「学習評価の充実」の重要性が強調され、授業の改善と評価の改善を両輪として行っていくことの必要性が明示されている。この指導と評価の一体化については、次のような方向性での改善が求められている。

- ①教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ②生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

①や②を実現しようとする、新たな取り組みを追加していく場合が多くなりがちだ。しかし、先生方や生徒の負担を軽減しつつ、指導と評価の一体化を実現していくことが必要であり、それが③にあたる。

③については、実際に学校現場でも動きが出てきている部分であり、本コーナーで取材した学校では、次のような工夫が行われている。

評価にかかわる取り組みの見直し

自修館中等教育学校 (p26)

- 年間4回実施していた期末考査を廃止
- 単元テストや確認テストで生徒の状況を確認
- 定期考査廃止に伴う時間的余裕を生かして、授業を改善

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校 (p34)

- 各学期2回の定期テストを廃止し「思考判断表現テスト」を実施
- テストを点数化せず、a・b・cの段階で評価

両校ともに、単に既存の取り組みを廃止するだけではなく、新たにどのような評価場面を設定するかということ考えた取り組みとなっている。

観点別評価の基本構造と 各観点での留意点

<図表1>は、各教科における評価の基本構造である。

新学習指導要領では、目標および内容が資質・能力の三つの柱で再整理されたことを踏まえて、各教科における観点別評価の観点が、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。

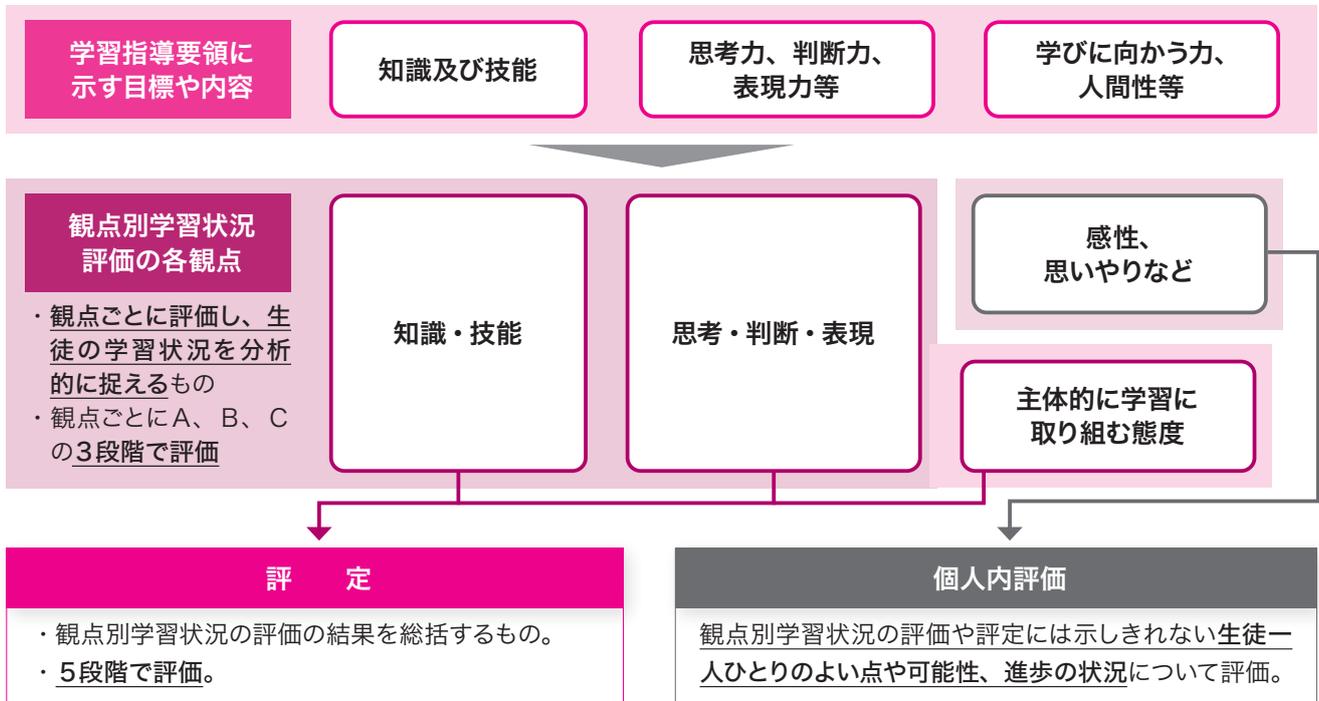
また、従来の評定、取得単位数に加えて、「観点別学習状況」欄が指導要録の参考様式に新設された。しかし、調査書への記載は見送られた。

また、観点別評価については、次のような留意点が示されている。

(1) 知識・技能

- ・ ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮する
- ・ 生徒が文章による説明をしたり、観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなど実際に知識や技能を用いる場面を設ける

図表1 各教科における評価の基本構造



(「学習評価の在り方ハンドブック」などをもとに河合塾作成)

(2) 思考・判断・表現

- 既習の複数の知識・技能を総合し、思考するような記述式問題などが考えられる
- 論述やレポートの作成、発表、話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れる
- パフォーマンス課題を取り入れたり、ポートフォリオを活用する

(3) 主体的に学習に取り組む態度

- ①粘り強い取組を行おうとする側面 ②自らの学修を調整しようとする側面を評価
- ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料とする
- 「主体的に学習に取り組む態度」のみを取り出すのではなく、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の状況を踏まえて評価する

「主体的に学習に取り組む態度」については、評価方法でお悩みの先生方が多い。たとえば、本コーナーで取

材した先生方は次のような工夫をしている。

「主体的に取り組む態度」の評価の工夫

自修館中等教育学校 (p26)

- 「思考・判断・表現」を主軸におきつつ、生徒と対話し、生徒の生の声を聞き取ることで「主体的に学習に取り組む態度」の評価

大手前高松中学・高等学校 (p30)

- 「主体的に学習に取り組む態度」を「自分の学習を適切にマネジメントしようとする態度」と読み替えて評価
- 予習シートとリフレクションシートを導入
- 教員の評価と、生徒の自己評価をすり合わせる機会を設ける

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校 (p34)

- 毎授業リフレクションシートを記入
- リフレクションシートは常に生徒が見られる状態
- 教員が必要に応じてアドバイス

改めて評価の目的に立ち戻り

指導と評価の年間計画を見直していく

観点別評価の流れは、<図表2>のようになる。

観点別評価に取り組むにあたっては、各観点の趣旨を踏まえながら、各教科・科目等の学習目標を設定することが重要である。その上で、各教科・科目等の目標を踏まえて、生徒の資質・能力をどのように評価するかを考え、評価するのにふさわしい活動をどの場面に設定するか、その場面に向けてどのように授業を組み立てるかを計画する（逆向き設計）。

観点別評価導入により、業務量が増え、先生方の負担が増加している中ではあるものの、新学習指導要領において、学習評価の充実を図る目的は、「生徒のよい点を見つける・伝える」「生徒の成長を促す」ことにある。本コーナーで取材した学校では、次のような意識で取り組みを行っている。

「観点別評価」の目的意識

自修館中等教育学校（p26）

- 点数ベースの評価観、指導観や、知識偏重の状態を、資質・能力の三つの柱を育む形に変えていく
- 大手前高松中学・高等学校（p30）

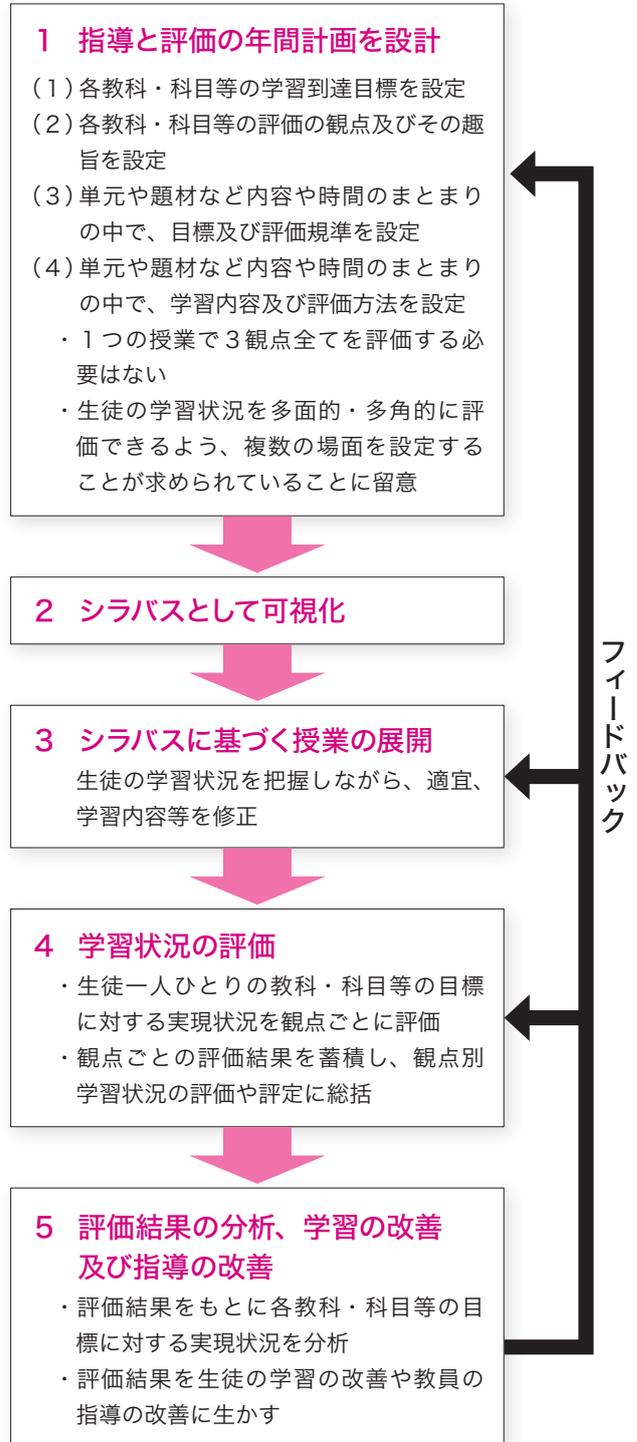
- 「こんなふうには学べばいいんだという気づき」「メタ認知能力の向上」「自分の学びに責任を持つ」といった生徒の変容を目的として、取り組みを設計する

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校（p34）

- 「どのような生徒を育てたいのか」「生徒にどんな力を身につけさせたいのか」を明確にする
- 建学の精神に基づいた教育に立ち返る

観点別評価本格導入から1年以上たったこのタイミングで、改めて評価の目的に立ち戻り、必要に応じて見直しや、新たな取り組みを検討したい。

図表2 観点別学習評価の流れ



(大阪府教育委員会『新学習指導要領の趣旨を踏まえた「観点別学習状況の評価」実施の手引き』などをもとに河合塾作成)

観点別評価は約半数が「うまくいった」一方 9割以上が「課題を感じる」

Guideline編集部で、観点別評価に関するアンケートを実施した。2022年度の観点別評価に関する取り組みを振り返った際の所感としては、約半数が、「うまくいった」（「うまくいった」「おおむねうまくいった」の合計）と回答した一方で、「課題を感じる」（「大きな課題を感じる」「課題を感じる」の合計）とした割合は9割を超え、大半の先生方が観点別評価に関する課題を抱えていることがわかった<図表1>。

回答を選択した理由（自由記述）を見ると、「うまくいった」と回答した先生方からは、「新課程初年度と言うことも有り、全職員で『試行錯誤』『年度途中での調整も可』として、いわゆる『例年通り』『従来通り』といった固定観念を壊しながら、『新しいものをつくる』という意識を共有しながら取り組むことができたから」「事前に評価対象とする課題とその課題で評価する観点を生徒と共有した」といった記述が見られた。一方、「うまくいかなかった」と回答した先生方からは、「多忙な中で実施しなければならなかったこと」「準備不足もあり形式的なものになってしまった」「観点別評価と最終評価の整合性」といった記述が見られた。

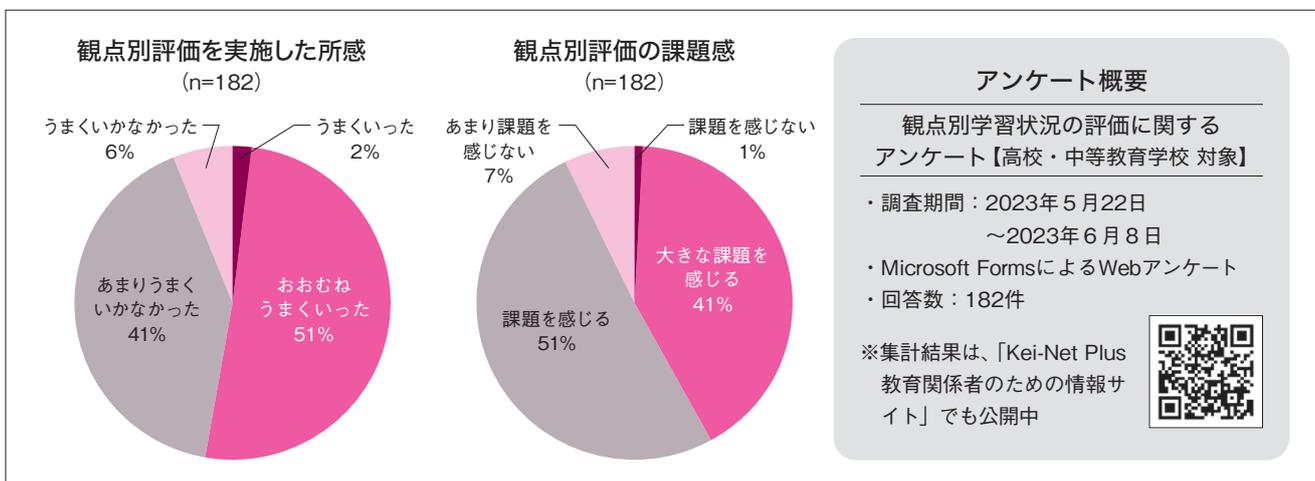
また、「課題を感じる」と回答した先生方が大半であったが、その理由としては、「これまでの評価からの切替」「客観的な評価の難しさ」「評価基準の統一」などが挙げられた。

さらに、観点別評価に関する取り組みについてもうかがったが、以下のようなものが挙げられている。

- ・ 指導と評価の計画
- ・ 多様な場面の設定
- ・ 定期考査の問題を観点別に出題
- ・ 振り返りの機会の設定
- ・ パフォーマンス課題の実施
- ・ 評価のすり合わせ
- ・ 評価の省力化
- ・ 生徒や保護者への情報共有

さまざまな課題は残っているものの、試行錯誤を繰り返し、観点別評価を着実に実施している現状がうかがえる。先生方の観点別評価に関する課題や取り組みについての自由記述は、p22、p23にまとめている。また、同様の内容で、3名の先生方からコメントをいただいた。

図表1 観点別評価の現状



アンケート自由記述より（一部抜粋）

観点別学習状況の評価に関する課題

これまでの評価からの切替

- ◆ ほぼ定期考査のみでの評価だった制度から日常の授業に対する取り組みを大きく評価する制度に抜本的に変更したため、現場での混乱があった。
- ◆ 担当学年からはABC評価から評定に変換すると本校では4が少なく、5と3が多くなる変な分布となったようで、この評価で良いのかという疑問のまま1年を終えてしまった。
- ◆ 観点別の生徒に知らせる区切りがABCの3段階でCはほとんど付かないので、AかBの区切りのみとなる生徒が多くなり、自分の頑張りの評価の変化を感じづらい。
- ◆ 観点別評価への賛否はともかく、導入されたからには趣旨に沿って授業改善に結びつく評価を積極的に行うべきだが、一部の教員は旧来の評価観から抜け出すことができていない。

客観的な評価の難しさ

- ◆ 知識と思考力にそれぞれカテゴリーされる生徒の行動とそれに対する評価方法について、明確なガイドラインや例がない。
- ◆ 主体性の評価が難しい。教員間で格差が生じやすい。客観性を保とうとすると形式的な評価になりがちである。また、テスト作問上の工夫も大きな労力を要する。

評価基準の統一の難しさ

- ◆ 評価基準を全教科で統一、合わせていく事が難しい。
- ◆ 評価に主観が入ってしまう。先生によっても基準がずれる。
- ◆ 主体的に学習に取り組む態度の評価基準がうまく定まらず、正しく評価できているかは疑問である。しばらくは手探りでやるしかない。

適切な評価材料の収集の難しさ

- ◆ 主体性評価の材料がうまく集められなかった。
- ◆ 知識・理解、思考力・表現力・判断力、主体性のABCの付け方、材料の選択に一部（特に主体性）苦慮した。

趣旨に沿った運用の難しさ

- ◆ 観点別評価と、学期末に行う総括的評価の整合性がうまく取れていない気がするから。本来であれば形成的評価に活用すべきところだとは思いますが、本校では学期末にしか観点別評価を行っていないため、この評価を受けて学習改善を図る、という本来の目的を果たしていない。
- ◆ 手間のわりに生徒に還元できていない。観点別によって、生徒の力が格段に伸びたというエヴィデンスが本当にあるのか疑問を感じる。
- ◆ 授業を変えることへの教員からの理解が得られない、形成的評価をうまく活用できていない。

評価の煩雑さ・時間不足

- ◆ 生徒一人一人に対して3観点の評価を行うためには時間もスキルも足りない。結果的に、ペーパーテスト以外では、ノートやレポート、リフレクションシートの提出の有無や記述量など、見てすぐにわかるようなものの評価にならざるを得ない。また、3観点であるため、定期テストで80点あっても評定が3ということもある。
- ◆ 評価が煩雑になり先生方が成績を出す時間が以前よりかかっているように感じた。働き方改革という観点からみると逆行している気がする。やはり主体性を評価するのが難しいように思う。評定が進路（入試）にかかわるので評価に入れることに対して抵抗を感じる先生が多い。そのため、どうしても無難なつけ方になって、本来の目的からずれてしまっているように感じる。

観点別評価の取り組みの工夫

指導と評価の計画

- ◆ 育成したい生徒像をめざしながら、授業内容を単元ごとや教材に反映していくようにしている。
- ◆ 章のまとめりごとの評価と毎時間の活動をリンクさせておくと評価も説明もしやすい。
- ◆ 職員間で情報共有を図りつつ、各教科においてはシラバスとの整合性をとる。各教科の単元ごとに評価項目やバランスを精査する必要がある。

多様な場面の設定

- ◆ 定期考査の工夫、およびレポート等の記述課題を出題、ICTを活用した評価方法の模索。
- ◆ 授業ノートやレポートの細目な確認と観点別評価についての生徒への具体的な説明。
- ◆ 学校として観点を付けるのは年度末のみであるため、観点別にペーパーテストを作成し、毎回のテスト後にフィードバックをしている。毎授業毎にリフレクションを設定しポートフォリオ化している。
- ◆ デジタル教材とツールを用いて日頃から「主体的に学ぶ態度」をきめ細やかに採点しています。

定期考査の問題を観点別に出題

- ◆ 考査、定期テストの設問を、知識・技能、思考・判断・表現、どちらの問題か意識している。
- ◆ テストの内容を、知識・技能と思考・判断・表現に分け、それぞれを評価の基本とした。

振り返りの機会の設定

- ◆ 毎回授業の最後に振り返りをさせている。
- ◆ 学びの修正を促すための振り返りをよく行うようになった。
- ◆ 振り返りの機会を適切に設け、学習改善に資する評価となるよう意識している。また、その振り返りの内容についても継続して試行している。

パフォーマンス課題の実施

- ◆ パフォーマンス課題。授業内の振り返りなど。
- ◆ 「世界史探究」で毎時間、「問い」づくりを行っている。この「問い」の内容・レベルをルーブリック評価することで客観性を担保できた。
- ◆ 学期に1回、知識を得た内容の実験を自分で考えてやらせようと考えている。

評価のすり合わせ

- ◆ 評価基準に関して、担当教員どうしの意見のすり合わせ。
- ◆ 教務部を中心に各教科で評価のすり合わせをしている。
- ◆ 教務課が観点別評価の叩き台（指標）を出し、それに従って評価している。
- ◆ ルーブリックを作成し、先生方に活用してもらっている。

評価の省力化

- ◆ 評価対象物の簡素化。
- ◆ 評価を行う提出物をすべてデジタルデータにすることで、評価がずっと楽になりました。
- ◆ 評価点の入力からABCや評定を出せるエクセルの準備。

生徒や保護者への情報共有

- ◆ 評価の基準（ルーブリック）をあらかじめ生徒や保護者に示すことで、取り組みに対する目標をはっきりさせる。
- ◆ 事前に評価対象とする課題とその課題で評価する観点を生徒と共有した。各観点を評価する評価の場をできる限り多様にたくさん設定した。
- ◆ 観点別のプリント作成・観点別テスト作成・シラバスにて通知。



開智中学校・高等学校 (和歌山)
数学科 教務担当
松本佳也 先生

昨年度は、3観点のうち、「知識・技能」や「思考・判断・表現」については、定期考査、小テストや課題等を通して評価していったため、困難はありませんでした。一方、「主体的に学習に取り組む態度」については、教師の個人内評価にとどまらないように気をつけながら、生徒の自己評価や相互評価と合わせて、客観的に判断できるように心がけました。その結果、特に生徒の自己評価などは自分自身の指導改善には役に立った一方で、生徒の学習改善には十分につながっていなかった部分もあったのでその点は改善していきたいです。

課題としては、「主体的に学習に取り組む態度」の評価があげられます。大学入試の推薦要件に評定に関する条件がついていることが多く、その評定を算出するための観点別評価には、公平性や客観性が強く求められます。しかし、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する上

昨年度の所感



おおむねうまくいった

課題感



課題を感じる

で評価基準を明確にすればするほど、主体的評価を上げることだけに固執して、肝心の学力がともなわないことがあります。また、評価する側の教員の考え方もさまざまであり、教員間の意思統一や、指導と評価の一体化も難しい課題です。

観点別評価に関する取り組みとしては、観点別評価導入にあたり、2021年度から現職教育を行うとともに、実験的に観点別評価を複数の先生に実施していただき、そのデータをもとに問題点を整理しました。また、実際の運用にあたっては、教科・科目および担当者間での観点別評価と評定の基準統一のために、「観点別チェックシート」を教務部が作成し、成績提出前に各担当者が自分でチェックできるようにしました。



東京都立調布南高等学校
地歴公民科 進路指導部
徳武英人 先生

2022年度は他校に勤務しており、「公共」で観点別評価を実施しました。教科の特性を考えて、生徒の活動をメインとし、年間を通じて定期考査を実施しませんでした。「知識・技能」の評価は小テストとプレゼン資料の作成、「思考・判断・表現」は200字程度のエッセイとプレゼン、主体的に学ぶ態度や学びの意欲は、各授業における対話やグループワークと、毎回の振り返りアンケートで行いました。各項目を学校で定められた割合で評価しましたが、おおむね生徒の学力を適切に評価できたと考えています。

生徒の資質・能力を多面的に評価することは大切ですが、生徒の発言や発表を教員が客観的に評価することに課題を感じます。ルーブリックで評価する場合でも、その内容が妥当かどうかの判断が難しいです。また、生徒のエッセイを読むには時間がかかり、こちらも客観的に

昨年度の所感



おおむねうまくいった

課題感



大きな課題を感じる

評価をするのが難しいこともあり、観点別評価を行うならば、教員が評価する時間を十分に確保する必要があると考えています。また、学校や教員によって評価の題材に違いがあるのは問題だと考えていますし、より根本的な問題は、多くの教員が観点別評価の意義やその手法をきちんと学ぶ機会がないままに導入されてしまったことなのではないかと感じています。

現在の取り組みを行う上では、これまでのような「知識・技能」を定期考査で測定して評価するという意識を持たないように心がけており、評価方法の視点から授業の構成を考えるようにしています。また、生徒の資質・能力を多面的に評価したいので、各授業でのスピーチ、グループでの対話、各授業での振り返りアンケートを重視した評価を行いたいと考えています。



北海道浜頓別高等学校
校長
三井智和 先生

昨年度の所感



あまりうまくいかなかった

課題感



大きな課題を感じる

昨年度の所感

昨年度、観点別評価を実施してみて、観点別評価の趣旨が生徒の学びの履歴や個々の能力差を考慮したものになっていないと感じました。

たとえば、「学習の過程を通した知識・技能の習得」とありますが、学校以外での学び（塾や習い事）や高校入学以前に身につけていた「知識・技能」との関わりをどう考慮するのか。また、高校入学以前に単元での学習に必要な「知識・技能」を習得しており、「学習の過程」における変容が見取りにくい場合、学校での学習過程に特化して評価することが可能か、適切なのかといった点には難しさを感じています。

実施上の課題

まず、形成的評価である観点別評価を用い、総括的に「評定」とすることで、単位認定や対外的な成績の証明として、結果の正当性を担保できるのかは疑問です。

ABCを点数化したり、ABCの個数により評定を決めたりしても、段階のカットポイントや評価基準の定め方の違いで評定が変わってしまいます。

また、観点別の評価が過程の評価である以上、単元の始まりと終わりで評価が変わることがあります。どの時点の評価を用いて総括するべきかということや、単元毎の観点別評価に差異がある場合、どのように評定の総括に用いるべきか、何が適正なのかがわからないまま進んでいます。さらに、一定数の学校が成績評価の目安を設定していることから、観点別評価をそのまま評定にした

場合、規定に達しない評定の結果が出る場合もあり、観点別評価を優先すべきか、評定の基準に合わせて観点別評価を直すべきか、判断が分かれるところだと思います。3段階で表すABC評価は「B おおむね満足できる」と「C 努力を要する」の幅が大きく、評定に総括する上でCとなった生徒の評定をどう扱うのかがあいまいです。「おおむね満足できる」水準に達しない場合は、「努力を要する」との隔たりの程度を考慮せず「C」評価となります。不認定1と評定2、3との違いを改めて根拠づける、二重の手間が生じます。

観点別評価で測る学力が実態と合っていないというのも課題です。たとえば、「知識・技能」が不足しているのに他の2領域が高く評価され、評定・評価と学力の実態が異なることで、大学入試に対応できる学力が身につけていない生徒がいます。正しく評価されないことで、不利益を被るのは生徒だと思います。

学校での取り組み

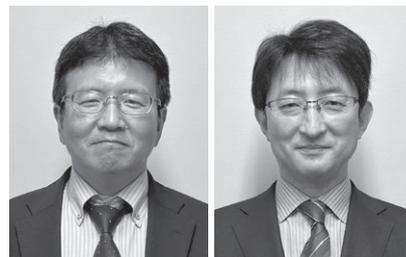
本校では、観点別評価についてAAA、ABA、ABB、BBB、BCB、BCC、CCCの7種による運用を原則としました。運用にあたり、成績会議および校内研修で中教審資料等をもとに趣旨を説明し、共通理解を図りました。教職経験が少なく、評価の力量形成の途上にある教員も少なくないため、評価の基本を身につけることを主眼とし、原則を外れる評価を行う場合は、根拠を説明できる明確なものとするすることで、評価に責任を持つ意識を醸成できました。

「期末考査廃止」に伴う時間的余裕を生かして 資質・能力を高める授業の充実につなげる

自修館中等教育学校

Point

- ✓ 2021年度から、年間4回実施していた期末考査を廃止
- ✓ 年間で実質12週間分余裕ができ、授業が変化
- ✓ 生徒の意識も変容してきている



教頭
大藤行央 先生

進路情報室長
川澄勤 先生

ペーパーテストの点数ベースの評価では 生徒は「暗記が勉強」との意識になりがち

神奈川県伊勢原市の自修館中等教育学校では、2021年度から、年間4回（同校は4学期制）実施していた期末考査を廃止した。その背景を、教頭の大藤行央先生と、進路情報室長の川澄勤先生は次のように語る。

「以前の各学期の評価は、期末考査の点数の比重が8～9割で、それ以外の部分は多少加算される程度でした。評価を生徒の学びにフィードバックする取り組みも薄かった気がします。そうした点数ベースの評価観、指導観を、資質・能力の三つの柱を育む形に変えていかなければいけません。けれども、これまでのやり方を踏襲していたのでは、ずっと同じ状況が続くだけでしょう。そこで思い切って、従来型の評価の象徴である期末考査の廃止に踏み切ることにしたのです」（大藤先生）

「期末考査のようなペーパーテスト中心の評価だと、どうしても知識偏重になり、生徒は『暗記することが勉強』といった意識になりがちです。大学受験を見据えると、そこに課題も生じていました。ある教科では、期末考査の1週間ほど前からの授業では、その対策指導が施されており、その結果、期末考査の成績は良くても、模試の結果とリンクしない生徒が少なくなかったのです。生徒も期末考査のための勉強をやっていたらいいという感覚になり、期末考査の1～2週間前だけ集中的に頑張り、継続的な学習習慣が身につけていない生徒も見られました」（川澄先生）

こうした問題意識から、期末考査の廃止に踏み切った

が、すべてが一足飛びに運んだわけではない。

「期末考査の代わりに、授業中の小テストや単元終わりのテストなど、さまざまな評価の機会を設け、生徒の継続的な勉強を促すなど、多くの教員は今回の改革を前向きに捉えています。ただ、複数の単元を重ねた上で、それらに基づいて思考させるテストも必要という意見も根強くあります。確かに、教科の特性として、学びがある程度まとまった段階で、テストを行った方が効果的な教科もあると思われます」（大藤先生）

そこで、2021年度は、1～4年次（中1から高1）の国語・数学・英語に関しては、「まとめテスト」という名称のテストを実施した。中学段階で重要になる学習習慣の確立に役立つという目的もあった。もちろん、従来の知識再生型の問題では意味がない。授業で取り上げた問題の焼き直しではなく、学んだ知識を使って、思考力などを働かせて解く出題を心がけたとのことだ。さらに、以前のように期末考査で成績の8～9割が決まるのではなく、「まとめテスト」の比重は半分以下が大前提となっており、多様な評価の中の一つの材料という位置づけだ。

『『まとめテスト』の実施時期も、学期の後半ではありませんが、最終盤にはしません。以前の期末考査は答案を返却して終わりでした。『まとめテスト』は通常の授業中に返却して、生徒の学習改善、教員の授業改善が図れるスケジュールにしています。ですから、各学期の成績が確定するのは、当該学期の末ではありません。生徒が学期間の休みに自主的に勉強して、次学期の最初に『再テストを受けたい』と言ってくれば、教員は対応し、改

善していれば成績は変化します」(川澄先生)

2022年度からは「活用力テスト」に名称を変更した。テストの出題が単なる知識の「まとめ」ではなく、それまでに培った力を「活用」する内容になっていることから、それを明確にするための名称変更である。

「たとえば数学では、共通テストを意識してか、問題文や資料を深く読み込まないと、何が問われているのか把握できない問題が出されています」(大藤先生)

「期末考査の点数がほぼそのまま成績になっていたときと違い、今は100点満点の1点刻みで点数化する必要はなく、活用力テストではABCなどでの段階評価が可能です。点数の縛りから開放されて、たとえば英語では英作文の出題が増えています。厳密な採点よりも、添削

して生徒にフィードバックする時間を充実させる方が大事だと、教員も気づき始めているのだと思います」(川澄先生)

なお、2023年度から、4年次(高1)での活用力テストを廃止し、高校段階ではまとまった形のテストを実施しないことになった。期末考査廃止に伴って始まった、テスト以外の取り組みに、先生方が手応えを感じていることの証といえよう。

**毎授業の論述問題、実験計画・レポート作成など
新たな取り組みが実現可能に**

期末考査の廃止からの3年間を振り返ると、時間的な余裕が生じたことで、授業の変化が生まれたようだ。

「期末考査を実施していた頃は、1週間前までに試験範囲を終え、授業で試験対策をして、1週間の試験期間があり、採点・返却を入れて、計3週間も授業が停滞しました。4学期制ですから、年間12週間分進度が遅くなるわけです。その分を授業に当てられるメリットは大きなものがあります。私が担当する5年生・6年生(高2・高3)の日本史では、そのゆとりを生かして、50分授業のうち私が解説するのは20~30分で、残りは生徒が論述問題や基礎知識を問う問題<図表1>に取り組みます。回収したプリントはその日のうちにABCで段階的に評価しています。手間はかかりますが、論述さ

図表1 「日本史探究」授業内で実施するテスト(一部抜粋)

_____組 _____番 氏名 _____月 _____日 曜日(____)

○推古朝の国政改革

問 氏姓制度からみれば、冠位十二階の制度は画期的である。どういところが画期的なのか、氏姓制度と冠位十二階の制の違いを踏まえながら説明せよ。(比較の観点で説明する思考力の問題)

1. 大臣の蘇我馬子が大連の物部守屋を滅ぼしたのちに擁立した天皇で、592年に対立を深めた蘇我馬子により暗殺された人物は誰か。

2. 592年に初の女性の天皇として即位した、敏達天皇の後であった人物は誰か。

3. 叔母である2に取り立てられ、蘇我馬子と協力して政治改革にあたった人物は誰か。

4. 603年に制定され、氏族ではなく個人の能力や功績によって冠位が与えられた、人材登用のための官位制度は何か。

5. 604年に制定された、仏教の理念を取り入れて役人としての心構えを説いたものは何か。

6. 2の時代に、中国の隋に派遣された外交使節を何というか。

7. 607年に中国皇帝に臣属しない形式をとった国書を隋に持参し、翌年に答礼使の(ア)と共に帰国した人物は(イ)である。

8. 推古天皇のもと蘇我馬子・厩戸王が中心となって進めた政治・外交についての史料として誤っているものを、次のア～エから1つ選び、記号で答えよ。
ア 二に曰く、鷹く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。
イ 其の四に曰く、旧の賦役を罷めて、田の調を行へ。
ウ 唐の客裴世清、罷り帰らぬ。則ち復た小野妹子臣を以て大使とす。
エ 始めて冠位を行ふ。大徳・小徳・大仁・小仁・大礼・小礼…并せて十二階。

6世紀後半、中国で隋が大陸を統一し強大な国家を形成した。隋は(①)に遠征するなど、その圧力は朝鮮半島諸国に及び、東アジア世界は新たな局面をむかえた。倭では加耶奪還が念願の課題であったが、このころは王位継承をめぐる王族・中央有力豪族間の争いが激化しており、587年、蘇我馬子により(②)が滅ぼされた。蘇我氏を中心とした政権は加耶奪還をにらみ筑紫へ駐兵する一方で、600年に隋に遣使した。これも加耶奪還との関わりで国際的地位の承認を求めたものとみられている。その後、(A)倭は国内体制の整備をはかるとともに、(③)年に再度隋に使者を派遣した。しかし、これらの遣使は加耶奪還には貢献せず、倭の加耶奪還計画は頓挫することとなった。

618年、(④)征討の失敗などにより隋が減じ、かわっておこった唐は、律令制度にもとづく強力な統一国家を建設した。唐は周辺諸国を圧迫し、朝鮮三国はそれぞれ国力の強化につとめた。このように東アジア情勢が緊張するなか、倭も630年に(④)を唐に遣使する一方で、(b)唐から留学生が帰国し、彼らもたらした知識を基礎に国内体制の強化が目指された。645年に蘇我大臣家が滅ぼされると、その後の新体制は権力集中を図るとともに、国域拡大を進めていった。

9. 空欄①～③に該当する語句または数字を答えよ。

10. 空欄④に該当する人物で、最後の遣隋使としても派遣された人名を答えよ。

11. 小野妹子が隋に派遣されたときの隋の皇帝名を答えよ。

12. 小野妹子の隋への再渡航の際に留学をした3人とは、南淵請安、曼と誰か。

13. 604年に制定された、憲法十七条制定の内容の特徴と目的について、次の語句をすべて使って説明せよ。尚、誰に対して出されたものなのかも説明すること。 儒教 仏教

(自修館中等教育学校提供)

れた内容を読むと、それぞれの生徒が理解したことが、頭の中でどのように構築されているのか、形成的評価を積み重ねることができます。生徒も、毎回の授業で論述問題が課されることで、ほぼ期末考査だけで成績が決まっていた頃とは、明らかに授業への姿勢が変わってきています」(川澄先生)

「私が担当する物理では、学習指導要領にある『見通しを持って実験をする』取り組みを導入しています。たとえば重力の単元では、重力加速度を測定するにはどうしたらいいのか、ゼロに近い状態から、それまでに学んだことを生かしつつ、生徒たちが実験計画を立てます。実験を行った後は、大学で使用している『レポートの書き方』を事前に生徒に配布しておき、目的→原理(仮説)→実験→結果→考察→まとめという流れを踏んで、実験レポートを作成してもらいます。この取り組みも、期末考査の廃止によって可能になったといえるでしょう」(大藤先生)

生徒の日常的な学習意欲が高まり 思考力などの重要性にも気づき始める

こうした学びの変化に、生徒たちはおおむね肯定的、好意的な反応を示している。

「期末考査のためではなく、日常的に学習しようという意識が根づいてきました。授業中に生徒が考える時間が増えたことで、知識・技能の習得だけでなく、思考力などを養う学習も大事だということに、生徒たち自身も気づき始めています。実は、最初の頃は『テストの点数以外の部分でも評価されると言われても、どうすれば成績が上がるのかわからない』という声が多く聞かれましたが、最近ではほとんどなくなりました。点数を重視する考え方から開放されるとともに、『どうすれば成績が上がるか』よりも、『本当の学力をつけるにはどうすればいいのか』という方向に、生徒の意識が変わってきています」(大藤先生)

なお、模擬試験の結果には影響は出ておらず、大学進学に向けた学力にも問題はないとのことだ。

生徒の意識の変化は思わぬ波及効果も生んでいる。

「美術の教員から、『提出物の質が明らかに向上している』との声が聞かれます。以前は期末考査で課されない科目は軽視される傾向が見られましたが、全科目が同一

線上になったわけです。考える授業が増えたことで、美術の作品においても、ちゃんと頭を使って取り組むようになっていきます」(川澄先生)

保護者の反応に対しては、心配もあったのだが、否定的な反応はほとんどないそうである。

「アンケート等でも、現在行っている取り組みに対して肯定的なご意見が多いですし、もっと思考力を鍛えるような授業を充実させてほしいといった声も聞かれます」(大藤先生)

思考力系を主軸にすると、生徒との対話が増え 結果として主体性の評価にも自信が持てる

これまでの取り組みを踏まえた課題としては、生徒への評価方法等の共有があるとのことだ。その課題に対する取り組みの一環として、シラバスの充実が進められている。川澄先生のシラバス<図表2>は、期末考査廃止前と比べて倍近く分量になっているとともに、「学習のねらい」や「評価方法」なども明記している。生徒にPDFで配布しているもので、今年度は、単元別にするなど、よりきめ細かなシラバスを作成する方向で、議論が進められている。

もう一つの課題は、主体的に学習に取り組む態度の評価だ。ただ、川澄先生は「本校で観点別評価の研修会を行った際、まずは思考力系を主軸にするよというヒントを得て、それを実践してきました。すると自ずと生徒と対話する機会が増え、何に悩み、その後どう変化したか、生徒の生の声を聞き取る中で、形成的評価ができるようになり、結果として主体性もある程度自信を持って評価できるようになりました」と今後の評価にもつながる方向性が見えてきたと語ってくれた。

自修館中等教育学校

◇所在地：神奈川県伊勢原市見附島411番地

◇創立：1998(平成10)年

◇卒業生数：2023年3月卒業生112名

◇卒業生の進路：公立大9名/私立大89名/専門学校6名/その他8名

図表2 シラバス(一部抜粋)

Study Plan

日本史探究 (単位数 4)

学年・コース・組	5 学年
使用教科書	詳説日本史探究(山川出版社)
副教材等	詳説日本史図録(山川出版社) 新編史料日本史 (東京法令出版)

1. 学習のねらい(学年目標)

- ・社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり、活動を通して広い視野から考察したりすることで、グローバル化した国際社会における民主主義国家の一人の形成者としての責任感を持ち、資質・能力を育成することを旨とする。

2. 学習到達目標

- (1)旧石器時代から江戸時代までの展開に関わる諸事象に関する知識を獲得し、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、諸資料(史料)からも様々な情報・データを適切かつ効果的に調べ、まとめる技能を身に付けるようにする。
- (2)旧石器時代から江戸時代に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の因果関係や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握したりする力や、文章で説明する力を養う。
- (3)旧石器時代から江戸時代に関わる諸事象について主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解力を獲得し、歴史を学ぶ意義を見出し、他国の歴史と文化を尊重することの大切さを認識する。

3. 学習計画及び評価方法

学期	学習内容	学習活動や学習のねらい	評価方法等
1 学期	・旧石器文化 ・縄文文化と社会 ・弥生文化と社会	○各時代を特徴づける遺物・遺跡・史料から当時の社会について考察し、特徴を説明する能力を養う。 ○各時代を特徴づける概念の背景について、因果関係を意識して理解し説明する能力を養う。	・毎授業の課題に対する取り組み姿勢は形成的に評価される。 ・知識の正確な習得を確認するための複数単元にわたる総括的な評価が行われる。 ・理解した内容について説明する能力を確認するための複数単元にわたる総括的な評価が行われる。 ・再試験を何度でも受けることができる。
	・古墳の時代(3世紀～6世紀) ・飛鳥の朝廷(6世紀～7世紀) ・律令国家の形成過程(7世紀)	○弥生時代と古墳時代の共通点と相違点を見出し、変化の背景・結果・画期を理解し説明する能力を養う。 ○東アジアと日本の交流と文化的・政治的つながりや影響について理解し、因果関係を説明する能力を養う。	
	・律令国家の仕組み ・奈良時代の政治・外交・社会(8世紀)	○律令国家の仕組みを理解し、古墳時代と比較して特徴を見出し、説明する能力を養う。 ○奈良時代の政治史・外交史の経緯を理解し、背景・結果・画期について説明する能力を養う。 ○奈良時代の社会・文化の特徴と変遷の背景を理解し、説明する能力を養う。	
	・平安時代初期の政治(9世紀～10世紀) ・藤原北家の他氏排斥(9世紀～10世紀)	○律令国家が変質する背景・影響・画期について理解し、因果関係を踏まえて説明する能力を養う。 ○政治の仕組に関する内容を理解し、奈良時代と比較	・1学期から続く毎授業の課題に対する取り組み姿勢は形成的

4. 評価の方法について

知識・技能	主に単元テストにおける客観問題を根拠とする。授業プリントの課題に対する日々の取り組み実績も根拠とすることがある。
思考力・判断力・表現力	主に単元テストにおける資料読解問題と論述問題(因果関係の説明など)を根拠とする。授業プリントの課題に対する日々の取り組み実績も根拠とすることがある。
主体的に学習に取り組む態度	知識・技能・思考力・判断力・表現力の習得結果を基本にして、毎授業の課題に対する日々の継続性のある取り組み方を根拠とする。

- ・授業中の課題は形成的評価の根拠とするが、積み重ねていく中で総括評価の根拠として活用することがある。
- ・模擬試験に向けた取り組みと結果を総括評価の根拠として活用することがある。
- ・講座参加者については、講座の取り組み状況を根拠として評価にプラスすることがある。

(自修館中等教育学校提供)

教員・生徒がともに3観点で評価 比較によって「学びに向かう力」の変容を促す

大手前高松中学・高等学校

Point

- ✓ 予習・振り返り時に、シートで自分の思考を可視化
- ✓ 教員の評価と、生徒の自己評価がシートで比較できる
- ✓ 生徒にどのような変容を起こしたいのか明確化する



合田 意 先生

予習と振り返りにシートを活用 試行錯誤し修正していくことが重要

大手前高松中学・高等学校で理科・数学・情報を教える合田意先生は、授業中のグループワークを充実させたいという思いから、反転授業を取り入れている。生徒は毎回の授業前に動画を視聴して、その内容をまとめた「予習シート」を提出する。授業は内容確認のペアワーク、友人と協力して問題を解くグループワークを中心に展開し、確認テストを行った後、宿題として「リフレクションシート」が課される。この「予習シート」「リフレクションシート」<図表1>が、観点別評価にも役立つられている。

「予習シートには3つの欄を設けています。『理解したこと』は、きちんと言語化することで、わかったつもりで終わらせないようにすることが目的です。『難しかったこと』には、次のような思いを込めています。私の主担当科目である物理を、この先ずっと使い続ける生徒はほとんどいないでしょう。他の多くの教科もそうです。では何のために学ぶのか。たまたま素材が理科や数学、社会ただただで、その学びの中で、学び方を学ぶことが重要なのです。この欄の記述を通して、どこまでは理解できて、どこからわからなくなったのか、それを乗り越えるためにどんな努力をしたのかを言語化して、自分の思考を可視化することによって、自分なりの学び方の確立につなげていってほしいと願っています。『質問し

てみたいこと』は、学びの意欲が表れる欄です。多くの生徒は『なし』と記載しますが、この欄に何か書ける生徒はテストの点数も高い傾向が見られます」

一方のリフレクションシートの形式は、これまで柔軟に変更されてきた。当初のシートは、授業で学んだことを自分なりの言葉でまとめる形であり、「学び方」よりも、「知識・技能」に寄ったシートだった。そこで、「覚えているか」よりも「どう理解しているか」にフォーカスを当てたコンセプトマップ^(注)的活動を導入して、「良い学び方」と思える記述に高い評価点をつけるようにしたり、「学習方法」という言葉を多用して、自分の「学び方」を意識的に振り返らせるなど、試行錯誤を重ねてきた。

「いったん作って終わりではなく、適宜修正を加えることが大切です。私は、年度の途中であっても、必要ならば、シートの形式を変えるように心がけています」

現在のリフレクションシートにある「演習問題と確認テストからの学び」は、知識・技能のレベルを向上させることが目的だ。「共有されている他の人の前回内容のリフレクションシートや今回内容の事前予習シートからの学びやペアワークによって気づいたこと」は、ICTの利点を生かした欄だ。

「ロイロノート・スクールを導入し、その提出箱を共有し、他の生徒のシートも無記名で見ることができるようになっています。自分の記述と比較しながら、友人の記述に触発されることによって、学びが深められたケース

(注) コンセプトマップ：人間の思考プロセスを可視化したノート法で、記憶の整理や発想をしやすくする

が、かなり生じています。もう一つの『授業の後の思考活動欄（モヤモヤ・考えたこと・疑問に思っていること・気づいたこと・調べて分かったことなどなど）』は、

『わかった』で学びを終わらせてほしくないという思いで設けています。この欄に記載するようなことが、次の学びの原動力になりますし、自分の学習に責任を持

図表 1 予習シートとリフレクションシート

高2 物理 予習シート

No. の予習動画を視聴して

内容は理解できましたか？ できた・まあできた・あまりできていない・全くできていない

不明点は調べましたか？ 調べた・調べてない・不明点が無かった ←↑○をつける

理解したこと

が難しく感じることが多かったか(予習時)

質問してみたいことがあったか

このシートの取り組み度は？ 熱心・それなり・てきとー

高2 物理 リフレクションシート

(月 日)の授業について

冒頭のペアワークではうまく相手に内容を伝えられましたか？ うまく伝えられた・ある程度は伝えられた・全然伝えられなかった

確認テストの出来はどうでしたか 全問正解・惜しい・イマイチ・全×・解いていない・配布無し

確認テストの解説動画は視聴しましたか 視聴した・視聴していない

演習問題と確認テストからの学び(コンテンツからの学び)

共有されている他の人の前回内容のリフレクションシートや今回内容の事前予習シートからの学びやペアワークによって気づいたこと(他者からの学び)

授業の後の思考活動欄(モヤモヤ・考えたこと・疑問に思っていること・気づいたこと・調べて分かったことなどなど)

(大手前高松中学・高等学校提供)

っているかどうか表れる欄だとも考えています」

また、生徒がオリジナルのリフレクションシートを作成することを認めているとのことだ。

「思考力がまだ弱い生徒の場合は、私が用意したフォーマットに沿って記載させることで、思考を促すことができ、有用だと思います。けれども、いい意味で、その枠から飛び出せる生徒を束縛しないことも大切です」

主体性は「自分の学習を適切に マネジメントしようとする態度」で評価

合田先生は、予習シートやリフレクションシートを観点別評価にどのように活用しているのか。それを示したのが<図表2>である。

まず「知識・技能」は、ペーパーテストのみで評価し、「思考・判断・表現」は、ペーパーテスト4割+リフレクションシートの内容点6割で評価している。ちなみに両シートにつける点数には2種類ある。提出点（2点）は、期限を守れたか、記載に不備がないかを見る。内容点（3点）は、深い思考ができていないか、きちんと表現できているか、自ら学びとろうとする姿勢が先生に伝わってくるかなどで判断される。「思考・判断・表現」は、そのうちの内容点で評価される。

「よく質問されるのが、内容点の根拠ですが、私の肌感覚でつけているとしか言いようがありません。一時期ルーブリックを用いたこともあるのですが、私が物足りない、もう一歩踏み込んでほしいと感じるような記載でも、ルーブリックに照らし合わせると、Aをつけざるを

得ないケースが多発したため、現在はあえてルーブリックは用意していません」と語る。科目の専門家としての判断をもとに内容点をつけているのだ。

「主体的に学習に取り組む態度」については、予習シートとリフレクションシートの提出点+内容点のみで評価している。ただし、「主体的に学習に取り組む態度」を「自分の学習を適切にマネジメントしようとする態度」と読み替えて評価しているところに特徴がある。

「そもそも主体性を評価すること自体が矛盾をはらんでいます。主体性を養うことは、生徒にとっては主体的にさせられているわけで、それではもう主体的とは言えません。それに、教員に主体性を評価されても、生徒には納得できない場合も少なくないでしょう。けれども、『学びをきちんとマネジメントできているかどうか』という観点からの評価なら、生徒にもじっくりくる可能性が高いと思います。それでも、マネジメント力も客観的に評価するのは難しいと悩む先生も多いかもしれませんが、私は主観的な評価でいいと思っています。なぜなら、社会に出ると、上司や同僚からの評価は、売り上げの数値など、客観的な評価もありますが、主観的な評価にもさらされることになります。自分の夢や、社会貢献を実現するためには、他者からどう見えるかを意識することも重要なのです」

こうした先生からの評価と、生徒の自己評価を摺り合わせる機会が設けられていることも注目される。定期テストでは、3つの観点について自己評価する欄も設けられている。テスト返却後のリフレクションシートでは、

教員の評価と生徒の自己評価が併記され、比較できる。

「当然、異なる評価になっていることも少なくありませんが、教員の評価を押しついたり、単にその違いを生徒が不満に感じるだけでは、生徒の変容は生み出せません。そこで、両方の評価を相対化させた上で、何を感じたのか、それを踏まえて今後何に取り組むのかを生徒に記載してもらいます。他の生徒のシート

図表2 観点別評価の事例

高2物理での期末評価の付け方	
項目	測定方法
評価点 (100点満点)	ペーパーテスト×0.6 + 「平常点」×0.4
平常点 (100点満点)	予習シートの得点 + リフレクションシートの得点を100点満点に換算
予習シート/リフレクションシートの得点	提出点 2点 + 内容点 3点
提出点	期限を守ったか&記載に不備がないか ≒粘り強い取り組みを行おうとする側面
内容点	自らの学習を調整しようとする側面 + 思考・判断・表現
知識・技能	ペーパーテストのみで評価
思考・判断・表現	ペーパーテスト4割 + 「内容点」6割
主体的に学習に取り組む態度	「平常点」のみで評価

(大手前高松中学・高等学校提供)

もオープンにしていますから、友人への評価とも相対化させることで、気づきが生まれることを期待しています」

さらに、学年末のリフレクションシート<図表3>では、自分の観点別グラフ（3つの観点で、自分の力がどう伸びていったかを生徒自身が主観的に評価し、グラフ化する）や、「この1年間で新たに身についた学習方略」「この1年間で自ら意図的に起こした学習者としての変容」「この1年で振り返ってみれば起こっていた学習者としての

変容」などを記載する。学年末になると、どの欄もびっしり埋める生徒が増えてくる。自らの学び方への意識が高まり、表現力も向上していることがわかるとのことだ。

観点別評価は「学びに向かう力」を伸ばす 絶好のチャンスになる

こうした観点別評価の取り組みのメリットはどこにあるのだろうか。

「やはり、生徒に自分自身の思考が見え、確認できることが大きなメリットです。メタ認知を促すツールになっているわけです。また、反転授業では、動画視聴を怠る生徒が多いと機能しないという課題がありますが、予習シートに点数をつけることで、予習漏れを防げる効果もあります。デメリットは生徒も教員も負担が大きいことです。記入に時間をかけすぎる生徒もいるので、他教科との兼ね合いを考慮して取り組むように指導しています。一方で私の負担については、生徒が問題演習をしている時間（約30分）に、全員分のシートの点数をつけて、授業内で完結させるよう努めています」

最後に、予習シート、リフレクションシートを活用した観点別評価を行う上で、合田先生が重視していること

図表3 学年末リフレクションシート

令和4年度 高2理系αβ物理 学年末リフレクション

学年末考査の観点別評価

	自己評価	教員評価
(1)知識技能		
(2)思考判断表現		
(3)自分の学習を適切にマネジメントする態度		

注：手書き不可、フォント変更不可

学年末考査の所感(感想)

年間の自分の観点別グラフ

この1年で新たに身についた「学習方略」

物理に関する概念でこの1年で変容したもの

この1年で自ら意図的に起こした「学習者」としての変容

この1年で振り返ってみれば起こっていた「学習者」としての変容

あなたにとって物理を学ぶ意義・価値は何ですか？

(大手前高松中学・高等学校提供)

を語ってもらった。

「最も大切なのは目的の明確化です。私が起こしたい生徒の変容は、『こんなふうに学ばいいんだという気づき』『メタ認知能力の向上』『自分の学びに責任を持つ』ということです。知識・技能も、思考・判断・表現も、学びに向かう力を伸ばさない限り、本質的な変化は生まれません。その意味で、観点別評価は、学びに向かう力を伸ばす絶好の場面です。リフレクションシートで、観点別に自己評価し、私の評価と比べて、学び方を変える必要性を自覚し、その意識を表現できるようになっている。そんな生徒たちの成長に接して、大きな喜びを感じています」

大手前高松中学・高等学校

◇所在地：香川県高松市室新町1166番地

◇創立：1957(昭和32)年

◇卒業生数：2023年3月卒業生204名

◇卒業生の進路：国公立大54名／私立大115名／専門学校5名／その他30名

「どのような生徒を育てたいのか」 その目標の達成につながる観点別評価をめざす

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校

Point

- ✓ 思考判断表現テストは点数化せず、a・b・cで評価
- ✓ リフレクションシートは常に見返すことが可能
- ✓ 観点別評価導入を契機として授業改善が活発化



教科指導部主任
矢田修 先生



教務主任
井面千草 先生

目標の明確化、教科ルーブリックの作成を経て 2022年度から観点別評価がスタート

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校では、2018年度頃から、観点別評価の導入に向けた取り組みを進めてきた。教科指導部主任の矢田修先生と、教務主任の井面千草先生は、観点別評価導入までの課題や経緯について次のように語る。

「観点別評価とは何か、思考力・判断力・表現力とはどのような力かなど、さまざまな研修を積み重ねる中で、そもそも何のために観点別評価を行うのか、根幹から考える必要性を感じました。そこで、それまでの本校の教育を見直して、『どのような生徒を育てたいのか』『生徒にどんな力を身につけさせたいのか』、教育目標を改めて明確にして、その目標の達成につながる観点別評価をめざすことにしました」（井面先生）

「その過程で、教員の間に、建学の精神に基づいた教育に立ち返ろうという共通認識も醸成されていきました。また、教育目標に即して、各教科の評価項目をきちんと定めようということで、2020年度に『教科ルーブリック』、2021年度に『科目ルーブリック』を作成した上で、2022年度から観点別評価がスタートしています」（矢田先生）

そのほか、観点別評価や新しい形の授業運営を進めるには、校内での周知も課題だった。そこで、教科の意見交換を行う「教科会」が大きな役割を果たし、現在も継続して各種取り組みを推進している。

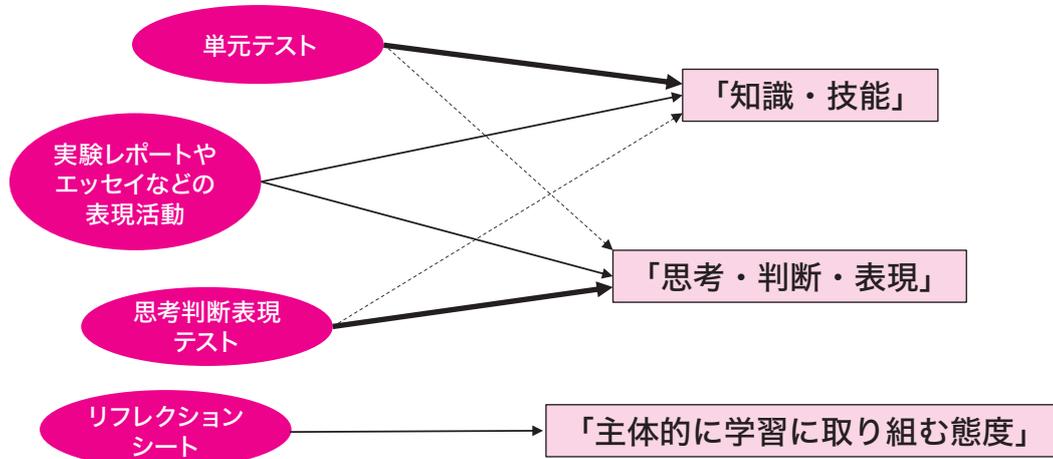
各学期2回の定期テストを廃止し 「思考判断表現テスト」を実施

同校の観点別評価の具体的な中身を見てみよう<図表1>。まず「知識・技能」は、定着度を測る単元テストのほか、実験レポートやエッセイなどの表現活動で評価し、「思考・判断・表現」は、学校独自の「思考判断表現テスト」<図表2>を中心に評価する。

「知識・技能、思考・判断・表現ともに、テストだけで評価しないことが大前提になっています。定期テストの廃止も検討しましたが、そこまで変えるのは難しい面がありました。そこで、各学期に2回実施していた定期テストを廃止し、代わりに名称を「思考判断表現テスト」に変更して、各学期1回実施することとしました。定期テストのままでは、知識・技能に偏った出題になる可能性があります。名称を変更することで、思考力・判断力・表現力を意識した出題に転換できるのではないかと期待したのです。実際、生徒に記述させる問題が増えていますし、国公立大学の2次試験や模試の問題を、生徒の学力に合わせてアレンジして出題するなど、さまざまな工夫が見られるようになってきました。私の担当の数学では、あえて間違った答えを提示して、なぜ間違っているのか、考えさせる問題を出したこともあります」（井面先生）

注目すべき特色は、すべてのテストが点数化されないことであり、当然、順位もつかない。点数の代わりに、テストはa・b・cで評価される（a+、a-のように、さ

図表1 観点ごとの主な評価方法



(取材内容をもとに河合塾作成)

図表2 「言語文化」思考判断表現テスト (一部抜粋)

五.次の文章を読み、問いに答えなさい。

【A】春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

【B】“In spring it is the dawn that is most beautiful. As the light creeps over the hills, their outlines are dyed a faint red and wisps of purplish cloud trail over them.”(Ivan Morris 1971)
 (日本語訳) 春、最も美しいのは夜明けである。光が丘の上に差し込むと、丘の輪郭がかすかに赤く染まり、紫がかった雲がその上にたなびく。

これらの文章は「枕草子」第一段の一部の原文【A】とそれを Ivan Morris が英語に訳したもの、その現代語訳【B】である。

問一. 【A】【B】の文章を踏まえ、「日本語の魅力」についてあなたの考えを述べなさい。

【参考】日本語は美しい文字や文化、歴史に根ざした独自の発音、言葉遣い、文法などがあります。また、日本語は表現することができる情報や話題の幅が広く、抽象的なものや感情を正確に表現することができるという特徴もあります。これらが日本語の魅力であり、良さにつながっています。

上記の文章は「日本語の魅力」について、ChatGPT と呼ばれる AI に質問した際の答えである。参考にしてもらって構いません。

	A	B	C
評価基準	日本語の「表現における特徴」について、【A】【B】の文だけでなく、それ以外の具体例を用いて他者に伝わる説明ができています。	日本語の「表現における特徴」について、【A】【B】の文から具体例を用いて説明できている。	日本語の「表現における特徴」について、参考文のみ用いて説明できている。もしくは自らの考えと根拠が結びついておらず、説明になっていない。

(名古屋経済大学市邨中学校・高等学校提供)

らに細分化も可)。同様に、課題レポートなど、日々の取り組みについてもa・b・cで評価し、それらを積み重ねていって、最終的なA・B・Cの評価がつけられる。

**全科目で毎授業、約5分間を確保して
「リフレクションシート」に取り組む**

次に、「主体的に学習に取り組む態度」は、リフレクションシート<図表3>の記載内容と、日々の取り組みの状況を照らし合わせて評価する。提出物の提出状況や、授業での発言の積極性などは評価対象にしていない。

リフレクションシートは、全科目で毎時間、授業中に約5分間、記入する時間が確保されている。

「リフレクションシートで、その授業でどのような活動をして、何を学んだかを振り返り、自分なりの次の目標を設定し、さらにその目標を達成できたかを振り返ります。統一フォーマットは用意してありますが、教員の

考えによって、書式は多少アレンジしてもかまいません。ただし、質問項目を増やすのはOKですが、減らしてはいけないことにしています。また、振り返りは単元ごとでいいのではないかという意見の教員もいますが、必ず毎時間実施することを要件にしています。なぜなら、生徒は『今日の授業でわかったこと』『疑問に感じたこと』を書く中で、次の授業ではそこを意識して受けようという気持ちになるからです。リフレクションシートに記録するために、ちゃんと授業を受けようという意欲も高まります。毎時間実施するだけの意義、効果があるわけです」(井面先生)

このリフレクションシートは、教員、生徒ともに、タブレットで常に見返すことができる。先生方は、生徒の記載内容を見て、どの程度粘り強い取り組みを行おうとしているのか、確認できる。努力を要するゾーンの生徒には、必要に応じて適切なアドバイスを送るように努めている。そうした先生方からのフィードバックが励みに

図表3 「地理総合」リフレクションシート

	1. 今回の授業を通じて、わかったこと・理解できなかったこと。(100字以上) 「内容の振り返り」	2. 目標の達成度・次回の目標 「取り組み方の振り返り」 <small>(前回立てた授業目標をどれくらい達成できたか、今回の授業を振り返って、次回の授業でどのような学びや活動をしたいか(次回の目標))</small>
4月8日	「災害想像力ゲーム」最後に先生が出した津波の高さや火事が起こる危険などは、これまで地震の学習をして知っていたが、今回は考えることができていなかった。その要因は、地図の中の情報ばかり気にしていたからだと思う。自分の頭の中で考えるだけでも避難はできないが、まず基本事項は頭で考えることが必要だと思った。また、地図というものから現実的な想像をすることの難しさを感じたので、その点でも基礎情報についてよく考えることが落ち着いて考えることのできるようになる秘訣かもしれない。	次回の目標：基本事項を確認してから、情報を活用して物事を考える。
4月19日 ⑥	「日本の地形と災害の関連性まとめ」まとめるものの内容が多かったのも、どうやって伝えようか迷った。自分自身が教科書を読んだ時に理解しにくかった、西南日本と東北日本については日本の図を書いていたが、それだけで時間が終わってしまった。その後、プレートがあることが大きな要因だと考えて、樹形図みたいにまとめようと思っていたが、時間がなかった。今考えると、図は一部の内容の理解補足になるものなので、発表を考える時に順番として全体像を決めておくのと良いと思った。	教科書の内容を自分で理解してから、情報をまとめた。 次回：全体の流れ(大きいこと)を確認してから、小さいことを考えたり、人に伝えたりする。
4月25日 ⑤	「発表作成・過去の災害から学ぶ災害対策の発表」自分のまとめをするときに、こちら側の説明のしやすさと聞く人の理解のしやすさに注意して、ネット上の地図を使うなどしてまとめた。プレートの仕組みについても調べ、プレート＝地殻＋最上部マントルだということがわかった。発表を聞いて、自然災害伝承碑がその被害を知らせる重要なものだとわかった。しかし、そういった石碑は灰色で自立たないで気づいてもらいにくいのではと思った。	自分で説明が今日しなかったが、その流れをイメージしながら作業することができた。 次回：現状、多くの人に災害に関する対策や情報が広まっている/いないのはなぜかを考える。
4月26日 ⑥	「発表(A・B・C)」今日は、自分の発表をした。話の軸(プレート)を決めていたので、落ち着いて話すことができた。質問の時間では、自分で分かり切っていないことを聞かれた。「災害」については膨大な量の情報が有り、準備しようと思えばどれだけでも調べられるのではないかと思う。今日他のグループが発表したようなことから、なんでだろうと思ったことがあればメモしておいて、ネットを使って調べてみたい。	自分が理解がらだと思った。たとえば、砂浜海岸の崖崩れによる避難についていることやアスファルトの構造は紐を巻くだけでは想像がつかない。そのため、最近よく行われている実験方式の実験に関する図は、参加者が見ながら、具体的なイメージを持つことができたので、その対策を考えたことが関係になると思った。 次回：次に取り扱う情報を、どのような方法で伝えたら理解が促されるかを考える。
5月2日 ⑤	「単元テスト①(日本の自然災害と地形)」今日は約35分の自習テスト勉強、そのあとテストだった。テスト自体は正誤問題で、教科書の語句よりもメカニズムを理解している必要があると思った。今回のテストに向けては、家でワークを解いてきたので、直前は教科書を見ていて、その問題形式にあった勉強ができたと思う。	【今回】今日は自分で伝えることはなかったが、砂浜海岸の砂鳴などの語句がなぜできたのかを考えられた。それは、その地方の人はそうやって呼ぶことが多いからなのではないかと思う。他の語句も意味があって存在していると思うので、なぜあるかも考えていきたい。 【次回】何を求めて地理の勉強をしているのか、ある言葉がなぜ生まれたのかなど、人々が何を求めて生きてきたのかを考える。
5月9日 ⑤	「地図を用いた特定地域の災害リスクの確認」自分の地域の災害リスク確認をすることができた。自宅は思いっきり液状化する場所にあり、盛り土も隣の家からは範囲に含まれていて、自宅のリスクを感じた。また、近隣施設についても確認してみると、私の出身小学校で避難場所候補の学校が盛り土の上にあることがわかった。災害の時に避難する場所の選定(学校建設地の選定)で災害リスクはどのように考慮されているのかが気になった。	安全な土地にいられることが最も良いが、それでも人は生活を営むために土地を広げたので、その災害リスクが出てくるのだと思った。 次回：自分の家の周りを具体的にイメージする。
5月10日 ⑥	「災害の発生時と発生後の対応について発表」他の人の発表で、具体的な家具の配置例などを見せてくれたので、とてもイメージがしやすかった。先生が以前言っていた具体的なイメージという話でいえば、今回の私の発表は文字ばかりだったので、見ている人にとってはイメージしにくかったと思う。これからの発表ではできるだけ具体的なイメージ(写真や図)を	今回：あまりの周りを考えられなかった。 次回：印象がつくような表現方法を考える。例えば、動作をつけたたり、言葉の漢字と結びつけて考えたりする。
5月16日 ⑤	「災害発生時と発生後の対応について発表」他の人の発表で、具体的な家具の配置例などを見せてくれたので、とてもイメージがしやすかった。先生が以前言っていた具体的なイメージという話でいえば、今回の私の発表は文字ばかりだったので、見ている人にとってはイメージしにくかったと思う。これからの発表ではできるだけ具体的なイメージ(写真や図)を	今回の発表が、先生が話していた避難のイメージが伝わってきた。避難のイメージは大きく分けて、避難してからの対応と避難のイメージ、今までは、避難のイメージが伝わってきた。自分自身がその事柄に対しての理解がなかった。自分の発表にイメージに対しては「面白い」という強い印象があり、それを聞き手にも伝えることができた。今回のような発表の準備について理解が深まった。しかし、不可能ではない。例えば、その事柄についての理解を深めていこうと努力すれば、それに伴って自分の考えや経験も強くなると思う。それに伴って自分自身も成長(強くなる)が期待できる。準備も理解してくると思う。 【次回】自分が何を大切にしているのかを考える。

(名古屋経済大学市邨中学校・高等学校提供)

なり、1年が終わる頃には、リフレクションシートに隙間なく書いてくる生徒が増えるそうだ。

授業やテストの出題内容の改善などを同時に進め、相乗効果を生み出す

観点別評価の実施に伴って、どのような成果が見られるのだろうか。

まず顕著なのが、生徒の授業への向き合い方の変化だと、矢田先生は語る。

「学期ごとに、生徒への授業アンケートを実施し、『授業を通して、どのような成長を実感したか』や『授業への要望』などを書いてもらいます。すると『自分が成長するために、もっとこんな授業にしてほしい』といった要望が数多く寄せられてくるのです。中には辛辣な批判めいたことを書いてくる生徒もいますが、それだけ生徒が真剣に授業に向き合おうとしていることの証明とも言えるでしょう」

この生徒の変化には、同校でここ数年、授業の改善が図られてきたことも影響している。

「単に観点別評価に移行するだけでなく、3つの観点を意識することが授業改善の契機にもなると考えました。実際、知識を注入する『チョーク&トーク』型の授業が減り、生徒に深く考えさせる授業や、生徒同士で意見を交わす授業などが増加しています。私も以前は、数学の解法のテクニックをいかに上手に教えるかに力点を置いた授業を行っていましたが、今では『この問題ではなぜその法則を使うのか』『別の解き方はないのか』といった問いかけを心がけています」（井面先生）

「本校では教員研修、研究授業などが活発ですし、すべての授業が公開されており、他の教員が自由に見学できるようにもなっています。見学した後はお互いに感想を投稿して、『優れた授業とはどのようなものか』について、教職員間で率直に意見を交わし、共有できる仕組みが構築されています。そうした学校の環境も、積極的な授業改善につながっています」（矢田先生）

そのほかの成果としては、リフレクションシートだけでなく、他の面でも、生徒の「書く力」が大幅に向上していることがあげられる。

先述したように、同校では、育成したい生徒像を明確にするところから議論が始まったわけだが、教育目標のひとつとして掲げられたのが「言語力」「論理力」の育成だった。「総合的な探究の時間」では、その力を育む授業が展開されており、生徒には文章を書くことや、自分の意見を述べることへの抵抗感がなくなっている。「思考判断表現テスト」でも、「これについてどう思うか、説明しなさい」という問題が数多く出題される。「書く力」の向上は、観点別評価導入に伴う多様な教育改善が、相乗効果を生み出したものといえよう。

このように、さまざまな成果が見られるが、いくつかの課題もあるようだ。

「英語では、生徒に日々の出来事をテーマとした英語エッセイを課して、それを評価するなど、一歩先を行く取り組みを進めています。ですが、教科によっては、評価において、テストの比重が高いケースも見られます。テストのみによらない評価を、もっと充実させていく方法を工夫すること。それが今後の重要な課題になります。また、観点別評価の導入に伴って、先生方が生徒の評価にとらわれすぎているところがあり、それは危ないことかもしれないと感じています。生徒も、観点別評価の導入当初、『どうすれば高く評価されるのか』と、評価ばかりを気にする雰囲気を感じられました。本来は、教員にとってはどのような教育、授業を行うか、生徒にとっては、どのような力を身につけるかが大切で、評価はその次に来るべきものはずです。評価ありきで物事を考える傾向は、変えていく必要があるでしょう」（井面先生）

名古屋経済大学市邨中学校・高等学校

◇所在地：愛知県名古屋市中千種区北千種3-1-37

◇創立：1907年

◇卒業者数：2023年3月卒業生451名

◇卒業生の進路：国立大3名／私立大293名／専門学校115名
／海外進学3名／その他37名